茸　と　の　出　会　い

川添 訓子

小学低学年の頃、私は千葉県船橋市の薬円台に住んでいました。秋の長雨の後、父に連れられ採ったハツタケ、ホウキタケ（カレエダタケ）は､松林に沢山発生し大収穫でした。しかしそれも三年程すると松林は殆ど消失し住宅地に変貌、それでもまだ家の裏庭に名も知らぬ茸、今思えばキヌガサタケ、が一本、つづく林の中に小型の白い茸、スギエダタケが生えており、雉、鶉が飛来する自然が僅か残された時代でした。

が、その後松林も林も全て無くなり、茸は見ることも出来なくなると共に、私の記憶のなかにある茸の影が薄らぎ三十年も過ぎた頃、筑波山を訪れた折、地元の人が茸採りをしており、その茸を見せてい頂いた時、遠い昔の記憶が蘇り、どうしても茸が知りたく、図鑑を求め様々の茸を眺める事が楽しく、魅力に取り憑かれていた折、中央博物館にて茸展を観、偶然にも吹春先生にお会いし、茸の談話会をご紹介下さり入会致しました。

その後新年会で天然のエノキタケに出会い、大きな喜び、更にその茸を数本下さる方ありで感激でした。そんな年の暮れに森林研究所でマツタケ菌の培養に成功のテレビニュースを知り大変嬉しく思い、是非これからの若い方にシモコシの培養研究に努力して下さる方が出てほしい等と、勝手に思いを馳せる今日この頃です。

森林研究所にて　2007.11.14